

## 滝本裕造の「ピアノの基礎」について

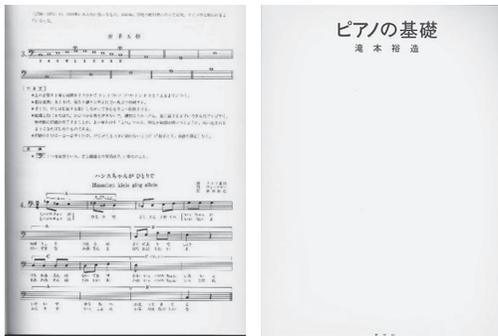
生涯学習音楽指導員  
三上 香子

はじめに

本稿は、大谷大学短期大学部幼児教育科（現・幼児教育保育科）の学生を対象に作成され、30年以上の長期にわたり学内だけで研究され続けられている（故）滝本裕造のピアノメソッド「ピアノの基礎」についての調査報告である。

一般的な保育者養成校でのピアノ指導は、楽譜を見ながら演奏することを前提に行われる。しかし「ピアノの基礎」は、鍵盤に向かうときはむしろ楽譜を見ないという、他とは異なる指導法をもつ。そこで筆者は、メソッドの作成や

指導に関わりのある大学教員数名にインタビューを行い「ピアノの基礎」の変遷と現状を知るとともに



図表1 ピアノの基礎の表紙と楽譜の一例

に、「ピアノの基礎」がもつ「写譜」「暗譜」「移調」の3つの柱について、現在行われている研究をもとに検証した。下記は、「ピアノの基礎」の表紙と楽譜例である。

### 1 背景と特徴

「ピアノの基礎」は、1984年に滝本裕造（1932～2013）によって刊行された。

保育者養成校にはピアノが不得手な学生が少なからず在籍する。滝本はそのような学生を対象に、在学中に保育現場で役立つピアノの演奏技術を育成するための教則本として、このメソッドを作成した。

なお、滝本が「ピアノの基礎」を刊行する15年前にも、同様のメソッドを作成していたことをあらかず報告書が存在している。そこに記載されている対象と目的が、「ピアノの基礎」と共通していることから、滝本が長期にわたる保育者養成校の学生のためのピアノ指導法について研究していた

図表2 3つの柱の目的

	目的
写譜	<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲の構成を知ること</li> <li>・読譜力をつけること</li> <li>・暗譜を促すため</li> </ul>
暗譜	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育現場で子どもの方を見ながら弾き歌いの指導を行うこと</li> </ul>
移調	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その曲が自分のものになったかどうかを確かめること</li> </ul>

ことはあきらかである。

「ピアノの基礎」の特徴は、楽譜を徹底的に覚え、ピアノに向かう際には楽譜を見ずに耳だけを頼りに練習を行う指導法をもつことである。これは、子どもの方を向いて弾き歌いをすることを目的とするからである。滝本はこれを可能にするために、「写譜」「暗譜」「移

図表3 ピアノの基礎の構成

	目標	内容	曲数
第Ⅰ章 ふしをひこう	リズムと音程をとって曲を覚えてひく練習(片手)	A. 五度音程以内の曲	8
		B. 五度音程を超える曲	12
第Ⅱ章 うたわせよう	音楽的にひくための練習	副次的目標として、両手での3度・ユニゾン奏	11
第Ⅲ章 ひびきをつけよう	バスをつけて豊かなひびきのある音楽にするための練習	ペダルの使用 伴奏音の選択	14
第Ⅳ章 あやをつけよう	主要三和音とその連続としてのカデンツを学び、これを伴奏型に用いること	アルペルティのバス	10
第Ⅴ章 ねいろをかえよう	ピアノとオルガンの比較	オルガン特有の奏法を研究する	14
第Ⅵ章 はばをひろげよう	右手の三度奏 左手の簡易伴奏	伴奏は自分の好みでよい。「ゆりかご伴奏」「四六伴奏」も学習する <sup>3</sup>	10
第Ⅶ章 あつみをつけよう	弾き歌いの練習	ピアノにふしが現れない弾き歌い・連弾の練習	8
第Ⅷ章 しらべを変えよう	わらべうたの伴奏づけ やさしい編曲の仕方	調を変える、拍子を変える練習	18

調」の3つの柱を構築した。図表2は、3つの柱とそれぞれの目的である。

## 2 構成と練習順序

「ピアノの基礎」は全8章で構成されている。各章それぞれに運指練習とドイッ民謡を中心とした短い課題曲が掲載され、それらすべてに、曲の解説・楽典・写譜を目的とした穴あき楽譜・移調先

の調名・ひき方が記されている。次の図表3は、教本の構成と記載されている曲数である。

練習順序が記されており、この順序は厳守されなければならない。なお滝本は、「ピアノの基礎」が刊行された翌年に京都市立芸術大学に転任した。そこで実際の指導は後任の教員らに継承された。次の変遷は、教員らへのインタビュー

図表4 練習順序

1. うた(教材)を階名と歌詞でおぼえる。	7. 右手でふしをひきつつ、その伴奏音は目で鍵盤を追う。
2. 空所を埋め、伴奏もつけた楽譜を書く。移調譜も書く。	8. 伴奏をつけながら、ふしをひく。 (つぎの音が目で確認できるまでひかない =ひき直しは決してしない)
3. 階名でうたいながら、目で鍵盤を追っていく	
4. 指づかいを、工夫して、それを楽譜に書き込み、おぼえる。 その指づかいで階名唱しながらピアノを弾く。	
5. 歌詞のある場合は、歌詞をうたいながらひく。	
6. 第Ⅲ章以後では、ふしにふさわしい伴奏音を考える。	

ューと大谷大学同窓会誌をもとに記載したものである<sup>4</sup>。

## 3 変遷

カリキュラムの面では、当初は教室に学生を集めて一斉に「写譜」を行い、その後個人レッスン教室に向かう方法がとられていた。

しかし現在は、「写譜」も個別に指導されている。内容の面では、研究の過程で「保育現場で使われている曲をもとに指導をしたほうがよいのではないか」という声が出たことから、現在は子どもの曲を使った「写譜」「暗譜」「移調」の特徴をもつ内容に変更されている。

同時に移調する調を減らし、ハ長調・ニ長調・ヘ長調・ト長調・イ長調の5つのみとした。オルガンの項目(第Ⅴ章)は削除された。指導法の面では、はじめから暗譜で演奏するのではなく、次第に楽譜を見ずに演奏できる方法に変更された。このようにメソッドには時代の変化に伴う多くの変更点が見られる。

しかし、子どもの顔を見ながら

の弾き歌いがピアノ指導の最終目的であることや3つの柱は守られ続けていることから、滝本の指導法は、30年以上の間も形を変えながらも本質が変わることなく継承されてきた、他に例のないピアノメソッドであると考えられる。そこで次項では、3つの柱に焦点をあて、現在行われている研究において「写譜」「暗譜」「移調」がどのように捉えられているかをみえることにした。

#### 4 3つの柱に関連する研究

①「写譜」に関する研究では、浅井暁子らが、「記譜法の学習は、音楽諸要素についての理解をより深め、楽譜に対する新たな視点を獲得するひとつの方法となりえる」と述べた。<sup>5</sup>浅井の研究方法が採譜であることと調査対象が音大生であることは、「ピアノの基礎」とは方法と対象が異なる。しかし高い音楽レベルをもつ者においても記譜の有効性が示されたことは、ピアノが不得手な者にとつ

ても同様の結果が得られる可能性を示唆していると考えられるであろう。またこのことは、滝本の「写譜」の目的のひとつである「曲の構成を知ること」とほぼ合致している。

②「暗譜」に関する研究は、大まかに3つに分類できる。

ひとつめは、ピアノリストを中心とした暗譜の方法論である。ピアノ専門雑誌ムジカノーヴァには、3名のピアノリストがピアノ演奏の完成形として暗譜演奏を捉え、それぞれの視点からの暗譜の方法について述べている。<sup>6</sup>また別の号では鈴木寛子が、暗譜の方法を具体的に9つに分類した。<sup>7</sup>なお鈴木本の「楽譜を書いて覚える」という項目は、滝本の「写譜」の目的と合致している。

2つめは、研究者が暗譜の是非について問う考え方である。ツィーグラーは、暗譜演奏に芸術的価値は存しないといひ、<sup>8</sup>森正は、暗譜のストレスが音楽を演奏する

楽しみを阻害する要因であると述べた。<sup>9</sup>また磯山雅は、暗譜できることが必ずしも音楽を理解していることとは繋がらない、と述べている。<sup>10</sup>

3つめは、科学者が暗譜と脳の関係を科学の分野で説明しようという研究である。<sup>11</sup>脳の可視化システムを使い、暗譜と脳の関係を客観的なデータをもとに検証する試みは、人には見えない部分をあきらかにした興味深い研究だが、現時点では得られたデータと暗譜の関係は未解明の部分が多い。以上のように、暗譜については、専門家の間でも見解の相違や方向性に違いがみられることから、滝本の暗譜の目的と合致する点を見つけることが難しいと思われた。

なお、ここで触れておきたいことがある。滝本は、楽譜を見ずに鍵盤を見ながらピアノを演奏することを「暗譜」と定義した。確かに楽譜を見ずに演奏することを暗譜というが、目線は鍵盤を見るものなのだろうか。この点について

視覚と聴覚の関係から初心者者のピアノ指導法を論じた永富正之は、次のように述べている。<sup>12</sup>

勉強の初めから楽譜や鍵盤を見る癖がつき、視覚に頼りすぎると、聴覚の識別能力が発達せず、いつも目で鍵盤を見ないと何の音を弾いているかわからないうという事態さえ生じるだろう。

幼児を対象にした永富と学生を対象にした滝本の指導法を比較することは時期尚早だが、永富の言う説が正しければ、滝本の指導法では子どもを見ながらの弾き歌いが難しいのではないかと懸念された。

そこで、「ピアノの基礎」の作成に関わった教員にその点について尋ねたところ、段階を経て徐々に視線を子どもに移行させる指導法が示された。おそらく滝本も、視線の移動訓練の追加を想定してこの教本を作成したのであろうと

推測された。

③ 移調に関する研究では、橋本鈴枝が、一定の年齢の学習者には、物事を体系的に捉える特徴があると述べた<sup>13)</sup>。そこでかれらには、効率的・かつ洗練された教材によるメソッドを提供する必要があるとし、具体的に「Beginning Piano for Adult」(バステインおとなのピアノ教本)の全調メソッドを例にあげて考察している。また橋本は、全調メソッドでの学習は楽典・読譜・移調などの総合的な展開を可能にする、と締めくくっている。

## 5 研究のまとめ

以上のように「ピアノの基礎」の3つの柱に関する研究をみてきたところ、「写譜」に関する研究では、浅井と鈴木の両者と滝本の間に、「写譜」の目的の面で一致する点がみられた。このことから写譜が、読譜力と暗譜力の向上に役立つ可能性が考えられた。「暗

譜」に関する研究では、研究者の意見や方向性の違いから、滝本の考えに対する裏付けを得ることは難しかった。

また、「ピアノの基礎」には目線の追加訓練が必要であることが推測された。「移調」に関する研究では、橋本が「写譜」の目的のひとつである読譜と「移調」が含まれる教材を、大人に適した総合的な発展教材と位置づけていたことから、それらを含む「ピアノの基礎」は、バステインの全調メソッドを発展させた位置にあると考えてよいと思われる。

## おわりに

以上のことから「ピアノの基礎」は、保育現場での実践的なピアノ演奏能力を培う総合的なメソッドである可能性があることがあきらかになった。これからも滝本式ピアノ指導法は大谷大学の教員の間で研究し続けられることであろう。

なお、「移調」の研究を行った

橋本は、一定の年齢の学習者として保育者養成校の学生と趣味のピアノ学習者の両方をあげている。

しかし、学生と趣味のピアノ学習者では、年齢や学習の目的など数々の相違点があることから、学生を対象に作成された「ピアノの基礎」をそのまま成人にあてはめて使用することは難しいと思われる。そこで今後は、趣味のピアノ学習者を対象にした「ピアノの基礎」の適用の可能性について研究したいと考えている。

## (註)

- 1 滝本裕造「ピアノの基礎」一木楽器、教本は1984年。京都市立芸術大学をはじめ、新潟大学・大阪教育大学・相愛大学・大阪芸術大学などの音楽専攻のある12の大学付属図書館で閲覧可能。
- 2 滝本裕造「ピアノ・メソッドについて」全国保母養成協議会研究大会報告書抜刷 1970年。
- 3 乖離伴奏の形について、滝本が名づけたもの。
- 4 大谷大学同窓会本部「無盡燈」2014年。
- 5 浅井暁子・横山舞「読譜力と記譜

法の相関関係についての考察―音楽教材への発展」教育実践研究、34、2008年、13-25。

6 上杉春雄・東誠三・峯村操「暗譜力アップ虎の巻」ムジカノローヴァ叢書、2011年8月号、pp.11-23。

7 鈴木寛子「確かな「暗譜」9つのポイント(特集 脳力開発 ピアノと脳の発育・活性化)」ムジカノローヴァ叢書、1996年12月号、pp.39-41。

8 ベアタ・ツイーグラー「耳から学ぶピアノ教本のために…ツイーグラー」長岡敏夫・水野信男訳、音楽之友社、1969年、p.34。

9 森正「楽譜と暗譜・それでも暗譜で弾きますか?」鳴門教育大学紀要、2014年。

10 磯山雅「暗譜考」弦楽専門誌「ストリング」第1巻、レッスンの友社、32-34、2008年。

11 山口理恵「ピアノの暗譜演奏と脳の賦活…ピアノ教育の視点から」、財団法人日本ピアノ教育連盟、23、2007年、55-66。

12 永富正之「音楽教育とピアノ」『ピアノ初歩指導の手引き1』最新ピアノ講座3、音楽之友社、1976年、p.63。

13 橋本鈴枝「成人(初心者)のためのピアノ教程についての考察」横浜国立大学紀要、1985年。